

日本比較内分泌学会の歴史点描

川 島 誠一郎 (元会長)

YFA71874@nifty.com

2004年3月26日～30日、奈良県新公会堂で第5回アジア・オセアニア比較内分泌学(AOSCE)会議および第29回日本比較内分泌学会(JSCE)大会(大会委員長 大石正先生)が開催されたことは記憶に新しいことです。冒頭、AOSCEの開会式につづき、本学会の創立30周年記念式典(菊山栄現会長の司会)が開かれました。その折に、名誉会員のH.A.バーン先生が祝辞を述べられ、私は標記のタイトルで本学会のエポックメイキングなできごとを中心に歴史を概観する挨拶をいたしました。ここではそれを纏めて書いておこうと思います。特集記事にすでに寄稿しておられる創設者の小林英司初代会長と石居進第2代会長ならびにバーン先生、他の諸先生方の原稿と、素材の点で重複する点も多いでしょうが、別号のニュースレターに順に掲載される企画のようですのでお許しください。

有史以前の活動

ホルモンの司る生命現象は古くから研究者の興味を惹きつけてきました。世界的には、イヌまたはテンジクネズミの睪丸の抽出物を注射すると老人が若返る、雄鶏を去勢するるときかが小さくなり、肉が柔らかく風味を増すといった18世紀の研究にまで溯ることができますが、わが国では、そこまで古くはなくても、20世紀に入って、カエルやカイコの変態、カナヘビの脱皮や鳥の換羽、ネズミの去勢や脳下垂体除去の効果、雌雄の生殖機能の分化など、いろいろな動物でホルモンのはたらきが研究されてきました。アドレナリンや昆虫のホルモンなどホルモン物質の発見も内分泌学を刺激し、本学会創設以前、つま

り有史以前に動物科学の一環として「ホルモンの生物学」の基盤が固まりつつありました。

「いろいろな動物」におけるさまざまなホルモン現象の比較生物学的研究は、比較内分泌学の誕生にとって極めて重要で、こうしたアプローチなしではこの分野が独立することはなかったわけです。いろいろな動物を用いてホルモンのはたらきを進化の視点から比較したり、共通原理を見出そうとする学問が比較内分泌学だからです。1961年6月、大磯で第3回国際比較内分泌学シンポジウムが、故竹脇潔先生を議長、小林英司先生を事務局長として開催されました。また、1962年にはA. Gorbman & H.A. Bern 著の“A Textbook of Comparative Endocrinology”が刊行され、「比較内分泌学」という名称が市民権を得ることに貢献しました。こうして、比較内分泌学に携わるわが国の研究者がひとつの学会を作る機運は醸成されていたわけです。しかし、日本比較内分泌学会が誕生するにはさらに13年間の発酵期間を要しました。

学会の誕生

「学会設立までの経過」や「設立の趣旨」については小林・石居両元会長の特集記事や学会ニュース第1号に詳しいでしょうから割愛し、会の当初の基本的事業計画のみをメモしておきます。

基本的事業計画は、1975年7月24日国立科学博物館講堂で開かれた設立総会で以下のように承認されました。

- (1) 年1回シンポジウムを開催する。
- (2) サーキュラー(ニュースレター)を定期的に発行し、会員相互の情報交換を図る。

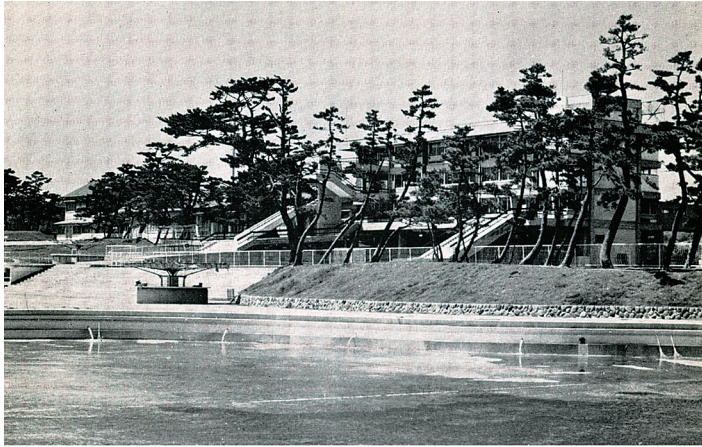


図1 大磯ロングビーチホテル(1961年)

- (3) 随時技術講習会を行い新しいテクニックを普及させる。
- (4) 会員間の共同研究を推進する。
- (5) 原著論文のための学術雑誌(ジャーナル)は発行せず、むしろ、単行本や啓蒙書を刊行する。多くの学会が自らのジャーナルを刊行しているが、そうした慣行を採用しないのは本学会の特徴でもある。
- (6) (5) の副次的効果として年会費を低廉に保てる(1975年は1,500円)。

設立総会では記念シンポジウム「比較内分泌学の最近の進歩 I」が7月24、25日開かれ、私は山本清先生のセッションで「下等脊椎動物における内分泌学の現況」について述べたことを思い出します。このシンポジウムの内容を中心に、ホルモンの生物学 I 「比較内分泌学序説」が1976年東京大学出版会から刊行されました。ニュースレターの編集は、遠藤浩良、平野哲也および私の3人が担当し、原稿を東大医学部図書館地階の林工房の和文

タイプに廻したものです。

大会とプロシーディング

シンポジウム以外に学術大会が年1回定期的に開かれるようになったのは1976年からで、第1回大会は3月26、27日岐阜県市町村会館で行われ、H.A. バーン先生が“Some possible contribution of comparative endocrinology to mammalian and human endocrinology”のタイトルで特別講演をされました。

やがて本学会が10年の歴史を刻もうとする頃、会員も500人以上を維持していたので、日本学術会議の認定学術団体に登録することが策定されました。登録にはレフェリー制度のある定期的学術刊行物を発行していることが要件であることから、1985年から英文のProceedingsが発行されることになりました。

Proceedingsの刊行は学会の10周年記念事業に位置づけられるものです。編集方針は現在も基本的に変わりありませんが、電子媒体

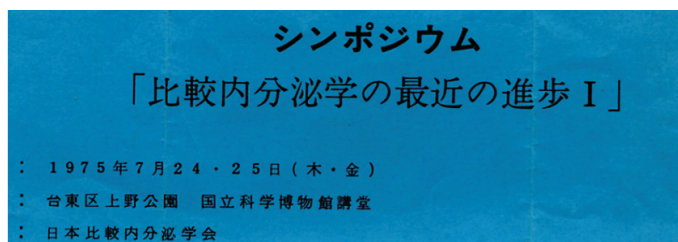


図2 設立記念シンポジウムのパンフレット

での投稿や表紙・本づくりの技術は長足の進歩を遂げ、随分と正確・簡便になりました。

10周年記念大会の折には、国外の3人の大御所から祝辞が寄せられたので、ここに再掲しておきます。

It is a great pleasure to be able to congratulate the Japan Society for Comparative Endocrinology on its 10th anniversary. In my opinion, the Society has proved to be more than successful by the nature of its meetings, the size and quality of its membership, and the recognition received by the Society outside Japan. One of my own proud recollections is to have been one of the Society's "gaijin" lecturers in its earliest days. No other single country has a national Society of Comparative Endocrinology like that of Japan. Professor Hideshi Kobayashi's foresight in recognizing the excellence of Japanese comparative endocrinologists and their collegiality resulted in a Society of several hundred members and a continuing program of high quality.

I offer my enthusiastic good wishes for another 10 years-- another 100 years-- of growth and accomplishment.

Howard A. Bern
Professor of Zoology;
Research Endocrinologist in the
Cancer Research Laboratory;
Chair, Group in Endocrinology

At the 10th birthday of the Japan Society for Comparative Endocrinology I want to wish the Society continuation of its excellent career and further development. Japan has a wonderful group of active and productive comparative endocrinologists and the Society optimizes its excellence. I am proud to be a charter member of the J. S. C. E.

Aubrey Gorbman

On the occasion of the tenth anniversary of the Japan Society of Comparative Endocrinology, I extend my warmest regards and most sincere congratulations to the Society. The international scientific community appreciates the high standard of the society under the outspices of the spiritual leadership of Professor Kobayashi. I wish the society continues success.

Andreas Oksche
Professor of Anatomy
Institute for Anatomic und
Zytobiology
Justus-Liebig-Universität

図3 創立10周年に際して国外から寄せられたメッセージ

国際会議主催

1. AOSCE

アジア・オセアニア比較内分泌学会議(AOSCE)が1987年に創設され、その第1回会議を本学会が第12回日本比較内分泌学会と併催の形で主催しました。1987年11月4～7日、愛知貿易センターにおいて、大西英爾大会委員長、石崎宏距事務局長、田名部雄一財務委員長、長浜嘉孝プログラム委員長等の組織で運営されました。AOSCE会議には欧米の主だった研究者も招かれますが、アジア・オセアニア諸国からの参加が会議の成否を分けることとなります。経済的に豊かでない国からの出席者に対する旅費援助に関して、事務局の粉骨碎身振りは今に語り継がれているほどで、銘記しておくべきことと思います。

欧米からの招待者を代表して、故A. ゴープマン先生はAOSCEの創設に対して祝辞を述べられましたが、この地域の研究者の能力と熱意に敬意を表するという趣旨で、参加者を激励されました。A. ゴープマン、H.A. バーン両先生のJSCEとAOSCEの発展に対するご尽力に対するわれわれの謝意を表わすため、本学会は1991年11月21日伊勢志摩における第16回大会で名誉会員の称号をお受け取りいただきました。

これらの事実は、本学会が国際的にも活躍

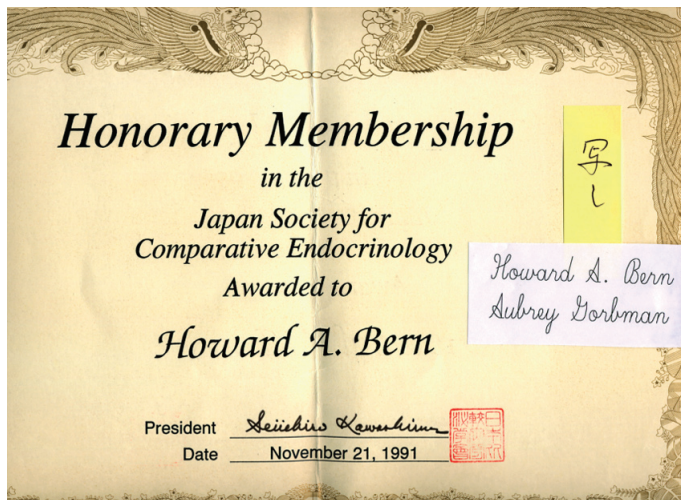


図4 名誉会員記の写し

の場を広げている証左であり、20周年記念大会(於：静岡県女性センター、矢内原昇大会委員長)の折に、当時のAOSCE会長のJ.Y.L. Yu中央研究院教授から祝辞が寄せられたのも別の証拠でありましょう。このように本学会はAOSCEの活動の中心的役割を常に担っており、本年3月26～30日には奈良県新公会堂で、第5回アジア・オセアニア比較内分泌学会議を主催しましたことは冒頭に述べた通りです。

2. IFCES

本学会はまた、国際比較内分泌学会連合(IFCES)が管掌する、第13回国際比較内分泌学会議を1997年11月16～21日にパシフィコ横浜で主催(大会委員長/国際プログラム委員長：川島誠一郎、事務局長：菊山栄)しましたが、これは大磯から数えて36年後にあたります。この国際会議は従来の場合とほぼ同様の方針で運営しましたが、ひとつだけ大いに異なる特徴を設けました。それは、通常1年後にシンポジウムの講演だけを収録したプロシーディングを発行するというしきたりを破り、一般講演の論文も収録し、完成した冊子を大会初日に配布するという計画でした。ウルトラEみたいな離れ業に挑戦したわけですが、成功でした。原稿締切りをぎりぎり遅めの10月6日に設定し、間に合ったものだけを夜を日に継いで編集し、直ちにイタリアの出版社(Monduzzi Editore, Bologna)に送って印刷したわけです。原稿完成—送付—出版社での編集—印刷—製本—航空貨物便(約2.5トン)による川島の研究所への到着まで、35日の計画です。何かひとつでも間違えば参加者への約束を守れなくなるので、実現可能性を十分に確かめたものでした。そのひとつに、出版社の力量を調べるために学会のついでにBolognaに見にいったことを挙げておきましょう。彼らの迅速さ、正確さ、廉価さ、およびアーティスティック表現力という総合的实力と比較して日本の出版社は遠く足元にも及ばず、一体どうしたことでしょう。

一般講演(ポスター)の論文も収録したことは大変に好評でしたが、できあがりは何と1,844頁(上下2巻)で、重さが4.0キログラムにもなっていました。参加者の便利のために包装段ボール箱と国際宅急便をお世話したので、多くの方は持ち帰らずに済んだ様子でした。

後日談ですが、2001年の第14回会議(Sorrento, Italy)でもイタリアの組織委員会はこの出版社と契約し、会議初日に配布することに成功しました。その上、CDか冊子かを選択できるように進歩していました。

第13回会議の前後にはプレコングレス・サテライト・シンポジウム1件とポストコングレス・サテライト・シンポジウム4件が開催され、本会議を含めたIFCESの1997年事業を成功に導きました。

国際会議主催といった事務なことばかり述べましたが、研究上も本学会会員が継続的に研鑽を重ね、リーダーの役割を果たしていることは、本会の機関誌に指定/後援しているGeneral and Comparative Endocrinology誌の主要投稿者が本会会員であることが雄弁に物語っています。

ニュースレターと単行書の出版

ニュースレターは年4号の頻度で出版されており、これに変わりはありませんが、歴代編集幹事の創意工夫と努力によって内容はますます充実しています。はじめの頃は事務的連絡が主な目的のひとつでしたが、最近はショート・レビュー、新技術紹介、学会情報、研究室紹介などで読み応えのあるものが圧倒的に増えました。表紙のフォーマットにも急速な進化が見られます。要するに楽しいニュースレターになりました。諸学会の同類と比較してみれば、その差は歴然としています。

本学会は、創設以来シリーズものや単行本の出版を機会あるごとに事業計画してきましたが、これは、そのような本の執筆機会の少ない研究者に機会を提供するとともに、科学的研究の成果を専門家集団以外の社会にも選

元するという効果があります。

これまでに、「ホルモンの生物科学シリーズ 1～10巻、1976-1992」(その内のVol. 9、「性分化とホルモン」は韓国語に翻訳された。翻訳者：李株河)、「ホルモンハンドブック、1988」、「ホルモン実験ハンドブック 1～3巻、1991」、「内分泌器官のアトラス—脊椎動物・無脊椎動物、1987：その英語版、Atlas of Endocrine Organs-Vertebrates and Invertebrates, 1992」、「ホルモンの分子生物学シリーズ 1～8巻、1996-1998」が出版され、最後に啓蒙書、「生命をあやつるホルモン—動物の形や行動を決める微量物質(ブルーバックス) 2003」を世に問いました。

以上、本学会の歴史から、記憶に残るエピソードメーカーな出来事を点描しました。素材は同じでもデッサンのやり方は人によって異なりましょう。つまり、歴史的評価はさまざまでしょう。しかし、日本比較内分泌学会が特徴のはっきりした、アクティビティの高い学会であるという、多少手前味噌的な結論は揺るぎないものと考えられます。

この結論から、将来の日本比較内分泌学会と比較内分泌学をどのように展望するか、何を期待するかが問われますが、問題を会員諸氏と私自身に投げ掛けたまま本稿を閉じます。

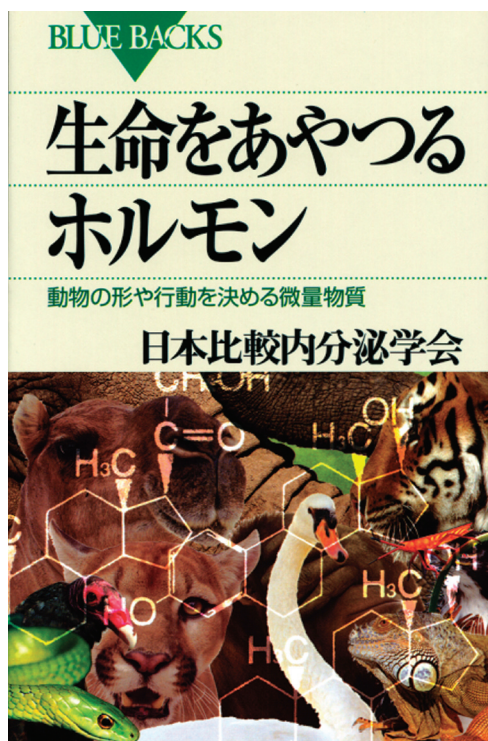


図5 生命をあやつるホルモンの表紙